

二〇一七年度 卒業論文

明光上人の歩み

コピー厳禁

L
1
4
0
0
0
2
明
山
晃
大

目次

序論

本論

第一章 明光の背景

第一節 時代背景

第二節 明光以前の仏教信仰

第二章 明光の活躍

第一節 関東六老僧

第二節 興正寺・仏光寺派

第三節 光明本尊

第三章 明光の生涯

第一節 二名の明光

第二節 明光房良

第三節 明光房了円

結論

註

参考文献

禁廠一ニ

序論

現代において浄土真宗の本願寺というと、浄土真宗の本来本元であるというイメージが一般的である。しかし、本願寺は開祖とされる親鸞の時代からあるわけではなく、本願寺を開いたのは親鸞の曾孫にあたる本願寺三世覚如が、親鸞の遺骨を納めてある大谷の廟堂を寺院としたものが本願寺の起源である。

それまで親鸞の子孫らは廟堂の管理者であり、関東をはじめとする各地で勢力をつけていた門信徒を管理できるように力はなかった。しかし覚如の時代になり本願寺を開いても、本願寺としての勢力はあまり伸びず、本願寺八世蓮如が現れるまで革命的な伸び方はしなかった。このように本願寺が勢力のない一方、本願寺と同じ京都の地で勢力を伸ばし、いち早く教団として成立したのが、仏光寺・興正寺（以下、仏光寺）派である。仏光寺とは仏光寺派七世とされる了源が山科の地に建立したもので、建立以降、関東の門弟の力を借り、京都で勢力を伸ばしていったのである。

本論では了源の師とされ、仏光寺六世にあたる明光に焦点を当て考察していく。明光という人物は関東で活躍し、関東六老僧のひとりとされる僧侶である。明光は関東以外にも活躍しており、広島県北部の備後地方に教化したとされ、その教線は広く、西国真宗の祖とされる。明光について辞書をひくと、『鎌倉・南北朝時代の真宗仏光寺派の僧侶、仏光寺六世、弘安九年六月（文和二年・正平八年五月一六日）と『真宗人名辞典』^①にある。

しかしながら、備後にある自坊をはじめ、明光が布教したという備後の真宗寺院の由緒や、明光が初めて建立したという鎌倉野比にある最宝寺の縁起には、長寛二年（一一六四年）から安貞元年（一二二七年）に活躍した

人物とあり、意見の喰い違いが見られる。また同じく『真宗人名辞典』では、出自について仏光寺五世誓海の子と記されているが、明光を開祖とする備後寺院や、鎌倉にある、源頼朝の命により明光が初めて建立したという最宝寺という寺院では、父は藤原鎌足公の末裔頼康、母は頼朝の嫡女であると残されている。

本論では明光について調査していき、結論として先に述べたような矛盾、喰い違いについて歴史的背景を踏まえたうえで調査し、考察していく。また、明光がいかに関西国布教をしてきたかを調査し、その歩みを知ることにも本論の狙いである。

本論

第一章 明光の背景

第一節 時代背景

明光について論じる前に、まずはその背景について知っておく必要がある。明光が活躍したとされる時代は、弘安九年（一二八六年）から文和二年（一三五三年）、または、長寛二年（一一六四年）から安貞元年（一二二七年）とされている。前者の説にしたがえば鎌倉末期から南北朝時代、後者の説にしたがえば平安末期から鎌倉時代の草創期に相当する。両説については第三章で論じることとし、この節では、鎌倉時代から南北朝時代に至る

までの歴史背景を概観しておこう。

鎌倉時代は源氏と平家の間で治承・寿永の乱、俗にいう源平合戦で源氏が勝利をおさめ、源頼朝が幕府を制定し繁栄した時代である。この時代の仏教は、鎌倉新仏教と呼ばれる浄土宗、浄土真宗が発生し、他力念仏の教えが民衆へ広く伝わった。しかし、念仏一つで救われるという考えにより、既存の仏教教団との軋轢が生じ、他力の教えをひろめていた法然、その門弟らが死罪や流罪に遭う承元の法難が起きた。浄土真宗の開祖である親鸞も越後の地へ流罪に遭い、その結果、関東に他力の教えが根付き、後に高田門徒、荒木門徒、麻佐布門徒といった勢力を築いていった。

明光もこの関東の流れを汲んでいる人物であり、別説ではあるが親鸞ともつながりがあったとされている。また、明光は当時の権力者との繋がりも深く、明光の母は源頼朝の嫡女であること、後述するが、明光が建立したとされる鎌倉の最宝寺の建立の際、源頼朝による頼みで建立されたと残されていることや、さらに備後教化の際、源氏と所縁のある武士を護衛にしていたことなどから、源氏との深い繋がりがあると見て取れる。源氏とのつながりは明光の西国教化にも関係してくる。なぜ明光が山南の地に降り立ち教化活動を行ったかという理由について、明光が教化を行った備後山南の地は、北条家の一族である大仏氏が統治している。北条家と源氏の間から、大仏氏のはたらかかけで明光が山南の地で教化活動を行ったのではないかと推測できる。他にも明光の周りには、本願寺の存覚を師とし指導を受けていたなど、明光の背景には歴史的に重要な人物との接点が多く見られる。

さて、明光は教化の際備後へと渡ったが、鎌倉・南北朝時代の備後の時代背景について見ていく。当時の中国地方全体に見られる動きとして瀬戸内海における海路の発展が見られ、それに伴い、水軍の存在が見受けられる。水軍とは沿岸地域で生活する人々、その統治をする地主を指す。もう一つの面として、水軍と称されるよう軍事力を持っており、主に海域の通行料の徴収や水先案内人、警護請負を行っていたとされる。瀬戸内海で活躍した水軍は村上水軍といい、当時は大きな軍事力を有していた。南北朝時代の南北朝分離の際に村上水軍は、後醍醐天皇率いる南朝に身を置いており、北朝の兵が水軍の拠点がある瀬戸内の島に攻め入るといった戦いがあった。このことから当時の情勢は荒れており、陸路、海路どちらをみても、危険な旅であったことは明確である。^②

明光が西国布教に來た時代は、源氏の助力を得ていたとしても渡航の路は厳しく、さらに動乱の最中であることをみるに、その道のりは厳しいものであったことが感じられる。こうした時代背景を経て明光は活躍していく。次節は明光が入る以前の備後における仏教信仰について見ていく。

第二節 備後における明光以前の仏教信仰

前節では明光が生き、関わったとされる時代を見た。村上水軍についても触れたが、彼らの多くは真言宗徒であり、また備後でも元真言宗という寺院は多く存在する。つまり明光上陸以前にも、備後の地に仏教信仰が既に根付いていたのである。この節では明光以前に行われた仏教信仰について見ていく。

備後に仏教が伝わったのは七世紀頃の飛鳥時代といわれている。『日本靈異記』に、この地域の大領が百濟の禪

師弘濟を招いて三谷寺を建立したという話があり、広島県の三次市向江田町にある史跡、寺町廃寺跡には三谷寺のものと思われる伽藍の後が残っている。このことから七世紀には備後に仏教が伝来していたと考えることができる。

八世紀ごろには国分寺・国分尼寺が国家鎮護のため各地に建立され、備後にもその遺跡が残されている。この七、八世紀頃の仏教信仰は、日本全国共通して、貴族など一部の狭い範囲での信仰であったと考えられており、備後もまた例外でなく、多くの民衆は接する機会はほとんど無かったのであろう。

九世紀へ移り、時代も平安へと移り変わると、最澄、空海によって開かれた天台宗、真言宗といった平安仏教が発生してくる。平安仏教の特色である密教が、貴族の中で流行し京都を中心として勢力を増していく。その流れが中国地方にも伝わり、備後の地域に入ってくる。天台宗は平家との繋がりが強く、また平家と安芸の地域のつながりも大きい。その双方のつながりの影響で、中国地方では宮島にある厳島神社をはじめ、天台宗の名残が多く存在する。また、安芸、備後の地域（以下、芸備地域）には元天台宗の寺院が多くあり、現在は真言宗の寺院は見受けられないが、当時の天台法華信仰が盛んであったと考えられる。

真言宗もまた、宮島とのつながりが深い。空海が宮島にある弥山で修行しという由縁があり、同じく宮島弥山にある真言宗御室派の大本山である大聖院の開祖とされている。大聖院の他にも、広島尾道にある真言宗泉涌寺派の大本山である浄土寺があり、福山にある定福寺も空海が開祖であり、真言宗も天台宗同様、芸備地方において広く布教されていたと考えられる。

このように芸備地域に天台宗、真言宗がにぎわう中に、時を近くして時宗や日蓮宗が入ってくる。これは明光が備後の地に入る少し早い時期であり、このすぐ後に明光は山南の地に降り立つことになる。さて、日蓮宗は備前（現在の岡山県南東部）の地域へと入ってきたが、その祖は大覚妙実とされている。大覚は、永仁五年（一二九七年）から貞治三年（一三六四年）の人物で、妙顕寺の二世であり、京都を中心に中国地方にまで至る地域の日蓮宗発展に貢献した人物である。元徳二年（一三三〇年）に備前へと赴き、そこで十三年のあいだ備前へ滞在し、その教線を備中（現在の岡山県西部）、備後へ拡大し、備前法華の祖とされている人物である。日蓮宗は浄土真宗と同じく、中国地方で大きな教線を拡大していく。後述するが、備後で存覚と「法華問答」と呼ばれる問答を起こすこととなる。^③

もうひとつの時宗であるが、その開祖は一遍とされる。一遍は延応元年（一二三九年）から正応二年（一二八九）の人物で、遊行という全国各地を巡り、念仏を教化する活動をした僧侶である。一遍はその遊行で、弘安元年（一二七八年）宮島へ参詣し、安芸、備前の地域に遊行をし、弘安十年（一二八七年）に備中、備後を遊行されたと残されている。そのつながりで尾道の海徳寺や鞆にある本願寺は、一遍が開祖とされている。時宗は浄土宗、浄土真宗と同じ念仏によって救われるとする浄土系の仏教であり、その時宗が尾道や福山といった、明光が教化した山南の周辺で遊行されていたことから、人々が真宗の教えを受け入れる地盤が整えられていたのではないかと推測できる。^④

時宗の他にも、浄土教の教えが備後に伝わったとされる伝承が残されている。それは、承元の法難の際に、備

後の地へ流罪となった浄聞という僧侶である。承元の法難とは、法然率いる吉水教団が説く、念仏が往生する為のただひとつの方法であるとする考えに対し、既存の南都仏教、平安仏教が異を唱え、最終的に後鳥羽天皇の命により、法然とその門弟たちが流罪や死罪に処された事件である。その結果、死罪四名、流罪八名の僧侶が刑に処されたのである。流罪となった僧侶は、法然が土佐国に、親鸞が越後国、行空が佐渡国、幸西が阿波国へと流罪になり、澄西が伯耆国、好覚が伊豆国、浄聞が備後国へと下った。澄西、好覚、浄聞については伝承が残されておらず、流罪後の消息は不明とされている。しかし、浄聞の墓と口伝によって伝えられる墓が備後の地域にあり、浄聞がこの地で布教活動をしていた名残が見とれ、浄聞もまた真宗布教の基盤となるものを作り上げたのではないだろうか。^④

このように明光上陸以前から備後をはじめ安芸、備中、備前といった地域で仏教信仰は盛んに行われていた。次章から明光という人物がどのような活躍をしたか、また明光の人物背景についても見る。

第二章 明光の活躍

第一節 関東六老僧

さて、明光といえば『真宗人名辞典』でも、まず「関東六老僧の一人」と書かれてあるよう、「関東六老僧」の明光という面が強く思われる。関東六老僧というのは、宝永八年（一七一一年）、願楽寺の宗誓が著した『遺徳法

輪集』で初めて記された語である。『遺徳法輪集』は、宗誓が親鸞とその門弟の遺跡の由緒と宝物を記したものである。『遺徳法輪集』三巻、関東六老僧の部分で、関東各地を布教伝道し、多大な活躍をした六人の高弟として「明光、明空（別名、専海）、了海、源海、了源、源誓」の名が記されている。この六名は伝道布教を各地域で行い発展させたとされており、明光は相模野比、明空は三河長瀬、了海は武蔵麻布、源海は武蔵荒木、了源は相模山下、源誓は甲斐等力の地を中心に勢力を伸ばしていった。これらの地域はいずれも関東の地であり、関東六老僧と名付けられた所以である。

また関東六老僧と同じく活躍した僧侶を称える語で、二十四輩（別名、二十余輩）といわれる二十四人（別説では二十三人）の僧侶の存在がある。二十四輩も関東六老僧と同じく、親鸞の関東時代の僧侶たちで、正慶元年（一三三二年）に本願寺三世覚如が、二世如信の三十三回忌を営んだ時、参詣していた僧侶の中から、親鸞から受け伝えられた教義を継承する者を選んだものであるとされている。

二十四輩の内訳は、性信・真仏・順信・乗然・信楽・成然・西然・性証・善性・是信・無為信・善念・信願・道円・定信・念信・入信・明法・慈善・唯仏・唯信・唯信・唯円の二十三人に、他説で入信を入れた二十四人である。この二十四輩の選出であるが、二世如信が直々に行ったとされる説や、三世覚如が法事を執り行った際選定した説など諸説あるが、如信や覚如が選定したことから、少なくとも「関東六老僧」という言葉が出来る前かあったものであろうと推測できる。江戸期には二十四輩が建立した寺院や所縁のある場所を巡礼する二十四輩巡拝が盛んに行われ、その影響で『二十四輩記』（享保十五年）や『大谷遺跡録』（明和八年）、『二十四輩順拝図

会』（享和三・文化六年）、『拊聚鈔』（元禄十三）等が刊行された。^⑤ その刊行された時代に、先述した『遺徳法輪集』も入っており、関東六老僧の語源は、この二十四輩と、日蓮宗に伝わる日蓮が臨終の際に指名した六人の高弟をさす「六老僧」を模して名付けられたと考えられる。

第二節 仏光寺・興正寺派

二十四輩の第二に真仏という僧侶がいる。真仏は鎌倉時代の僧で、親鸞が越後へ流罪となり、その後に関東へ下っていく際に、高田（現在の栃木県）の地で親鸞が教化を行つた時に感銘をうけ門弟となつた人物である。一躍、高田の地は真宗の一大拠点となり、その中で真仏は親鸞に最も親近であつた門弟と記されており、親鸞が帰京された後も、真仏が高田の門徒教団をまとめ、その指導者となり活躍したのである。その門下は関東から奥州、遠江、三河に広く分布する。まさに当時の初期真宗において、中心的人物といつても過言ではない人物である。また真仏は現在の専修寺や、仏光寺派、興正寺派の二世ともされている。^⑥

この真仏をはじめ、六老僧に挙げられる源海、了海、了源、序論で触れた明光の父とされる誓海、そして本論の主述である明光は、いずれも仏光寺派の歴代門主とされる人物である。仏光寺の歴代門主は、親鸞を初代とし、二代真仏、三代源海、四代了海、五代誓海、そして六代明光へと法脈が受け継がれる。明光に至るまでの背景として歴代の門主を見ると、真仏は先に述べたとおりであるが、もうひとつ真仏が指揮していた門弟たちは高田門徒と呼ばれ、後の仏光寺派門主につく荒木門徒、阿佐布門徒は高田門徒の流れをくむ集団であることを補足して

おく。

仏光寺三世源海は、出は武蔵荒木の武士であり、常陸の国（現在の茨城県）で真仏の門弟となつたとされている。これを裏付けるものとして、『源海因縁』に

さては常陸の国ゑくだらんとて、よこそねの真仏上人のみもとにたづねまいりさうらうて、相続念仏まうしてのちには、本国武蔵のあらきに住して源海上人とぞまうしける^⑦

とある。また、この部分から真仏との師弟関係や武蔵荒木（現在の埼玉県行田市）の地での布教も伺える。後に源海の率いる門徒集団は荒木門徒と呼ばれ大きな勢力をなす。

四世了海は、武蔵荒木の地で源海の門弟となり、その教えを受けたとされる。その後武蔵麻布（現在の東京都港区）の地へと赴き、同地に善福寺を建立し阿佐布門徒を形成したとされる。^⑧ 四世了海のもとで学び、門弟となつたのが、五世誓海、六世明光である。五世誓海は相模甘繩（現在の神奈川県鎌倉市）の生まれで、明光は相模鎌倉高御蔵（現在の神奈川県鎌倉市）の生まれである。誓海と明光の関係は、師弟の関係や兄弟弟子、または父親とも言われている。また、双方ともに仏光寺七世了源の影響で、本願寺存覚との親交があつたとされている。存覚の著書である『存覚一期記』に誓海の坊舎に寄宿したとの記事が残されている。後述するが、明光もまた備後教化の際、存覚との関わり合いがある。^⑨

こうして仏光寺の法脈は受け継がれていったが、明光の背景を調査するうえで存覚についても述べておかなければならない。存覚は本願寺三世覚如の長男で、教学を学問的に組織し、初期本願寺教団の基礎を作った人物

ある。覚如の教化の助けをし、越前、尾張などを教化するが、元亨二年（一三二二年）に父覚如から義絶をうける。この後、仏光寺教団と深い関わり合いを持ち、誓海や明光、仏光寺七世了源との交流があった。さらに存覚は誓海、明光、了源の師であったとされており、仏光寺教団の中に存覚の教学が深く入っていることが伺える。また存覚は建武五年（一三三八年）、備後の地へと赴き、法華宗徒との対論をした。法華宗徒を論破後、備後教化を助力し、明光の為に『顕名鈔』を著した。^⑩

また明光の法脈を継ぎ、誓海や明光と同じく存覚を師とし、教学を仰いでいた仏光寺七世了源についても見ていく。了源は弘安七年（一二八四年）から建武二年（一三三五年）、別説で永仁三年（一二九五年）から建武三年・延元元年（一三三六年）に活躍した人物とされる。出自については知られていないが、六波羅探題南方北条維貞の家人、比留維広の中間とされている。鎌倉の地で明光の教えを請けていたとされ、明光が京都に入京する際、了源もこれに同行し、京都の地へ寺院建立を目指した。元応二年（一三二〇年）、了源は本願寺三世覚如のもとに法門の教えを請い、覚如は存覚に指導を命じ、存覚と了源は師弟の関係となる。そこから了源を通じ、明光、誓海へと教えが伝わっていったのである。^⑪

明光と当時の真宗教団との関係、また明光に至るまでの法脈、師弟の関係について述べてきたが、これらの人物は明光について知るうえで密接に関わってくる人物である。

さて、前節では明光に関わる人物について見てきたが、この節では明光の教化について調査していく。明光ならびに仏光寺七世了源はいずれも光明本尊を用いての教化が多く見られる。光明本尊とは、名号を本尊としたもので、名号を中心に釈迦や阿弥陀仏、七高僧、聖徳太子や法然などの諸師が描かれ、その中に先述した宗祖親鸞から仏光寺の法脈が続く様が見られ、名号とは別に師弟の相承についても描かれている。明光と了源は、師である存覚指導のもと光明本尊を製作したと推測されている。

光明本尊という形は、明光、了源が初めて製作したのではなく、関東の門弟たちのなかで製作されていた。その源流は愛知県岡崎市にある、高田派の妙源寺が親鸞存世中に製作しており、親鸞存世中にはすでに形が出来上がっていた。光明本尊には六字名号を中心とするもの、八字名号を中心とするもの、九字名号を中心とするもの、十字名号を中心とするものなど様々な形がある。八字名号は、源海率いる荒木門徒の教線とともに三河方面に、また順信率いる鹿島門徒^⑩も、八字名号を用いて奥州方面に広がった。九字名号は、真仏率いる高田門徒らによって北陸方面へと伝えられた。

明光らも関東門徒の流れを引き継ぐものである為、光明本尊について知っていたであろう。明光、了源らはそれらの流れを引き継いで、教化活動を行ったのである。その中に存覚の指導が入り洗練され、明光、了源の光明本尊は広がりを見せるのである。^⑪

第三章 明光の生涯

第一節 二名の明光

明光という人物の生涯について説明する。明光の生没年は、『浄土真宗聖典（注釈版）第二版』の年表をはじめ、『興正寺年表』・『仏光寺年表』また真宗系の辞典では、序論でも述べたよう「弘安九年（一二八六年）六月〇文和二年・正平八年（一三五三年）五月一六日」とある。ただし、『興正寺年表』・『仏光寺年表』については没年については記述されていない。また『本願寺年表』・『真宗年表』には明光についての記述はされていないが、仏光寺七世了源の記述を見るに、こちらの説の時代に活躍していた人物であると推測できる。

一方で、明光が初めて建立した寺院である最宝寺や、西国布教の際に建立したとされる寺院の由緒では、長寛二年（一一六四年）から安貞元年（一二二七年）に活躍した人物と記されており、互いに比較しても百年以上にも渡る歴史の齟齬が見られるのである。明光について触れるには、まずこの点について押さえておかなければならない。

明光の生没年に関する考察は、鷲尾教導「明光上人の研究」『六条学報』（第一五巻、一九一五年）で、備後寺院、最宝寺の縁起通りである、長寛二年から安貞元年までの生没年では、時代的矛盾をはらむ部分が出てくると指摘されている。また『日本仏家人名辞典』では、明光に関する項目が、光照寺・最宝寺開山のである明光と、仏光寺六世である明光の二つに分かれている。つまり、明光は光照寺・最宝寺開山であり長寛二年から安貞元年まで活躍した明光と、仏光寺六世であり弘安九年から文和二年・正平八年まで活躍した明光の二名のいたという

ことである。光照寺史編集委員会編『備後光照寺 西国真宗の根本道場』では、この二名の明光について、

明光房良雲 最宝寺・光照寺開山 長寛二年（一一六四）〜安貞元年（一二二七）六十四歳

明光房了円 仏光寺派仏光寺六世 弘安九年（一二八六）〜文和二年（一三五三）六十八歳

とされており、この名称を本論でも用いることとする。ただし、この二名に対して『本願寺通紀』には「或いはいふ明光は、最宝寺の明光と同人なりと、されど年代相違せり」と書かれ、明光が決して二名いたとは限らないとされており、また現在している文献では、二名が混合している部分があり、比較が難しい部分が出てくる。後述では双方の生涯を論じ、その後に歴史的背景を踏まえつつ考察していく。^⑭

第二節 明光房了円

明光房了円とされる人物であるが、多くの浄土真宗系の年表にあるよう、真宗史で明光が扱われるときは主に了円を示している。了円は弘安九年（一二八六年）から文和二年（一三五三年）までの人物で、鎌倉から南北朝へと移り変わる時代に活躍した人物である。出生地は現在の神奈川県、鎌倉にある高御蔵という場所で、弘安九年（一二八六年）六月に出生されたとある。了円の両親については諸説あり、仏光寺五世誓海の子である説や、四世了海の子である説がある。また七世了源の実の兄という説など様々ある。有力な説は誓海の子であり、仏光寺派では了円は誓海の子とされている。^⑮

また正安三年（一三〇一年）に了円は得度をし、鎌倉高御蔵の地に最宝寺を建立したとされる。後に最宝寺は

戦国時代、高御蔵から相模野比（現在の神奈川県横須賀市）の地へと移され、現在もその地にある。最宝寺建立の後、了円は弟子であった仏光寺七世了源らと共に、京都に入京する。京都に入った後は記録が残っていないが、了円は興正寺（後の仏光寺）の寺務を携わっていたことから、興正寺建立の為に活動していたのではないかと推測できる。その後、了円は正和二年（一三二四年）一二月に西国教化の為、京都を離れ山南の地へ赴いて行き、了源は元応二年（一三一九年）、京都山科の地へ興正寺の建立をはじめ、了円と了源はそれぞれの道を歩むことになる。

さて、了円との繋がりが深い了源と存覚であるが、改めてその歴史について触れていく。了源は元応二年（一三二〇年）に興正寺の歎進をはじめ、本願寺覚如へ寺院創建のための勸進書を提出する。元享三年（一三二三）に興正寺を建立するが、興正寺と命名したのは覚如であった。勸進書の提出の際、勸進書以外にも了源は覚如へ法門の指導を願い、覚如の命により存覚が了源の指導を受けたのであった。ここから了源と存覚の友好が始まり、存覚は了源に『浄土真要鈔』二巻、『諸神本懐集』二巻、『女人往生聞書』一巻、を著し、その後も『破邪顕正鈔』三巻、『弁述名体鈔』一巻をそれぞれ著した。こうして了源は存覚の教学を学んでいたのである。存覚から教義を学んでいくが、元亨二年（一三二二年）存覚が父覚如からの義絶を受けている。存覚から教義を学んでいた了源もまた覚如との確執が生じてしまうこととなる。しかし、以後も存覚との関係を断ち切らず、了源は破門とされ興正寺の寺号返還を余儀なくされたのである。このことから新しい寺号が必要となり、存覚から仏光寺と命名してもらったのである。その後も了源は存覚の生活を支え、仏光寺内に住居し友好な関係を続けていくが、仏光

寺が火災となり、存覚は東国へ一時的に移り住むことになる。

存覚は仏光寺の後、誓海のもとである鎌倉甘縄の地に移り住む。『存覚一期記』に「着甘縄願念誓海」とあり、この願念とは誓海のことである。誓海は仏光寺五世とされており、了源は孫弟子にあたる。このことから、了源の紹介により誓海のもとに移住したのではないかと考えられている。存覚が仏光寺を離れたのが、元徳三年（一三三一年）の正月（元徳三年の正月は二月八日）であるが、誓海の没年が正和五年（一三一七年）五月二十六日（西暦では七月六日）と残されており、時代の食い違いがみてとれる。そして鎌倉の後、存覚は西国、つまりは了円の元を訪れたのである。^⑩

こうして存覚は西国布教へとやってくる。この頃の備後教団は、了円の弟子である慶円が中心となって動いており、了円は備後と京都を行き来している形であった。存覚が備後へと赴く際も、了円は鎌倉に居り存覚と一緒に備後へやってきたのではとされている。ここでも誓海同様、了円は了源の紹介で存覚に教学を学んだとされる。また『存覚一期記』に「於備後国府守護前、与法花宗対決了、御門弟依望申」とあり、存覚が備後の地へと赴いた際、門信徒の頼みにより法華宗徒との対決をしたと記されている。当時、備後へと真宗が伝わる以前に、すでに日蓮宗が入っていた。一章でも述べたように、日蓮宗の教線は備中や備後にまで広がっていた。その祖は大覚という人物で、日蓮宗の祖とされていた。

この大覚と対論したという記録は残されていないが、建武五年（一三三八年）三月に対論がなされたと存覚著『法華問答』、『存覚一期記』に残されている。

存覚はこの法華問答と言われる対論で、日蓮宗徒を論破し勝利をおさめている。この活躍により覚如との和解がなされ、存覚は京都の京都大谷の地へ移り住むことになる。また、この後である康永元年（一三四二年）に、覚如から再度義絶をされるが、存覚と明光の関係は見られない為、本稿では扱わないこととする。さて、存覚が京都へ帰るまでの間に『顕名鈔』を明光の為に著している。『存覚一期記』によると『顕名鈔』を著したのは暦応元年（一三三八年）と記されている。『顕名鈔』には、私たちは阿弥陀仏の名号のみを選ぶが、なぜ南無阿弥陀仏でなければならないのかということについて説かれている。また、名号が往生の正因であると信ずるだけでなく、なぜ称名で救われていくのか、南無阿弥陀仏とは何かを知っていれば、ますます信心が確かになると説かれているものである。^⑩

以上が明光房了円の生涯、歴史であるが、ここでは二名の区別が曖昧で、了円と了雲が混ざり合って伝わっているものが多い。混合する部分については触れず、考察にて述べていく。

第三節 明光房良雲

明光房良雲とされる人物は、長寛二年（一一六四年）から安貞元年（一二二七年）まで活躍したとされている。鎌倉の最宝寺の由緒や、備後で明光と所縁のある寺院に残されている由緒には、長寛二年からの人物と著されている。いずれの由緒にも一貫して、藤原鎌足の末裔頼康の四男であり、母は源頼朝の嫡女とされている。つまり了雲は源頼朝の甥であると著されている。了雲は十五歳の時、叡山明雲僧正の元で出家得度し、了雲明光坊と名

付けられた。その翌年から明雲僧正の勧めで慈鎮和尚を師とし、比叡山では仏道を学び学匠と仰がれるほどであったという。比叡山で仏門を深めるなか、了雲は建久七年（一一九六年）頼朝の頼みで鎌倉の弁ヶ谷に最宝寺を建立し、その本堂には頼朝の病氣平癒のため、薬師如来が設置された。鎌倉に身を置いてもますます仏門を深めていくが、そこで曇鸞大師の『浄土論註』を読み深める際に、他力信心の極致は非常に惑いやすいと思われ、名師へ教えを請われる。そこに偶然にも、親鸞が越後へ流罪されたという噂を聞き、承元二年（一二〇八年）三月に越後の国へ赴き、親鸞から弘願他力の法脈を受け、了雲は親鸞を師と仰ぐようになった。その後、最宝寺へ帰省し山号を五明山最宝寺へと改め、法流を天台から真宗へと改宗し、阿弥陀如来を安置されたという。

時に親鸞は他力真宗の法門について、凡夫往生の唯一の教えであるとし、その教えが広く布教されることを望まれた。都とその近国は、法然の長年の教化によって広く知られており、南海四国は法然流罪の地、東関北陸は自身の流罪の地であり、教えを勧めることが出来ると考えられた。しかし、西国に於いては教えを広める手がないとされ、了雲に対し西国へ他力真宗の教えを弘めることを命じられ、建保四年（一二一六年）了雲は西国に赴くこととなった。

了雲はこうして備後山南の地に降り立つのだが、その際に親鸞から賜ったとされる若我成佛等の真文および六字法号と、源氏所縁の武士の一族である、弘角、苜屋、新屋の従者十八名を連れて向かったとされる。山南の地に降り立ってからは、そこで働く人々を中心として布教活動を行っていた。そうした活動を行い真宗の勢いを増していく中、西国初の真宗寺院となる光照寺を備後山南の地に建立した。光照寺建立後、他にも数件、この地に

真宗寺院を建立するが、その勢いは備後だけでなく備中にまで勢力を伸ばし、さらに現在の島根県、山口県である山陰、周防まで明光を開祖とする寺院があり、教線が広がっていたという。このように西国での真宗基盤を築き、真宗布教の命を果たした了雲は、親鸞にその由を報告するべく再び親鸞の元を訪れることを望み、京都の地に赴かれた。しかしその道中に、山城鳥飼の地（現在の大阪府摂津市周辺）で病に侵され、「弘願念仏の法門普く西国に弘まらん事」と、弘願念仏の法門が西国にひろまる事を最後の言葉とし、安貞元年（一二二七年）五月十六日、随従の門弟に見送られ、洛陽鳥辺野の地で荼毘され葬儀が執り行われた。了雲の遺骨は備後の地へ持ち帰られたとされている。^⑧

以上が光照寺縁起に語られる明光房了雲の生涯である。他の明光所縁のある備後の真宗寺院や鎌倉の最宝寺の縁起も多少年代の誤差があるが、いずれもここで語った了雲と活躍した時代であり、年代の差異以外は総じて了雲と同じである。ここまで明光について調査してきたが、結論では二名の明光をはじめとする、矛盾や意見の違いに対して、一章で扱った時代背景や二章の明光の関わり合いの深い人物から考察していく。

結論

これまで、明光の活躍した時代背景や、関わり合いのあった人物、活躍した時代の違う二名の明光、明光房良

雲、明光房了円の生涯について見てきた。明光について調査したなかで、特に矛盾が感じられる部分は二名の明光の存在であろう。この二名の明光は第三章で取り上げたよう、

明光房良雲 最宝寺・光照寺開山 長寛二年（一一六四）～安貞元年（一二二七）六十四歳

明光房了円 仏光寺派仏光寺六世 弘安九年（一二八六）～文和二年（一三五三）六十八歳

と本論では定義している。この二名の活躍していた時代をみると、了雲は平安末期から鎌倉時代の草創期、了円は鎌倉末期から南北朝時代である。

第一章で見た当時の時代背景と照らし合わせて考えると、了雲が活躍した時代は、源氏が幕府を築き勢力をなした時代と重なる。了雲の母は源頼朝の嫡女とされていることから、最宝寺建立の際に將軍頼朝公の呼びかけや、備後への入港の際、源氏縁の武士が同伴したことから、源氏の了雲に対する助力が多く見て取れる。源氏が執権を執っていたのが三代將軍源実朝までであり、建保七年（一一一九年）に実朝が暗殺されるまで源氏の執権は続くが、その繁栄とともに了雲の教化活動も広がったであろう。

しかし、源氏の衰退とともに、了雲の旅路は厳しくなっていたのではないだろうか。了雲が備後教化に赴いた際の建保四年（一一二六年）は、当時の幕府と朝廷との確執が生じ始めていた。三代將軍実朝の暗殺後、実朝の後継者問題に当時の天皇であった後鳥羽天皇の皇子が予定されていたが、幕府がこれを拒否し、北条政子が後見となり源氏の血縁者である九条三虎を將軍としたのである。その結果、承久三年（一二二一年）に幕府と朝廷との確執が大きくなり、承久の乱が起こるのである。そのような中、朝廷がある京都を源氏に通じる了雲が通過

するのは容易ではないように思える。そうした背景から陸路ではなく、海路での入港であったのではないかと考えられる。また晩年に、親鸞の元を訪れようと京都の地に赴くが、この年代、安貞元年（一二二七年）の前に承久の乱が起こり、朝廷を管理する職である六波羅探題が設置され、朝廷と幕府も一時的には落ち着き、了雲も比較的行き来しやすくなったのではと推測できる。¹⁹

さて、了雲の時代背景を見たが、了円の時代背景にも焦点をあてて比較する。了円の活躍した当時は、鎌倉末期であり、源氏の衰退や幕府に対する不満は強く、特に後醍醐天皇率いる倒幕運動が起こり、社会情勢の不安がうかがえる時代である。了円が備後へとやってきたのは正和二年（一三一四年）のことである。当時の情勢は文保二年（一三一八年）に後醍醐天皇が即位するまで幾ばくかの年数があり、また芸備でも特に目立った事柄はなく、前後の時代と比較して情勢は厳しくなかったように思える。しかし、了円は山南へ教化に赴いたまま戻らなかったというわけではなく、山南と京都の地を行き来していたと残されている。存覚が備後に入る際も、了円が同行していたことから了円が行き来していたことが伺えるであろう。そこで存覚が仏光寺を離れた元徳三年（一三三一年）あたりの時代背景について見る。文保二年に後醍醐天皇が即位したことについて触れたが、後醍醐天皇は鎌倉幕府を倒幕し、建武の新政を実施した人物である。後醍醐天皇は即位直後から倒幕の意を示しており、元亨四年（一三二四年）に正中の変という、後鳥羽天皇の討幕計画が幕府側に知られ、首謀者が処刑される事件が起こっている。またその数年後、丁度存覚が仏光寺を離れた直後である元弘元年（一三三一年）から元弘三年（一三三三年）まで、後醍醐天皇を中心とした鎌倉幕府討伐の戦いである、元弘の乱が起きている。このことか

ら、存覚が山南の地へ入る頃は社会情勢が混乱を極めていたことが伺える。存覚が身を寄せていた誓海も鎌倉に住しており、乱の激化によって備後へ下ったという推測も出来る。了円は存覚と同行していた訳であるが、当時の情勢は戦乱により厳しくなっており、険しい旅であっただろう。また了雲と混合している可能性もあるが、晩年了雲と同様に洛陽鳥辺野の地で茶毘されたという伝承が残っている。ここから了円は少なくとも、鎌倉から京都へ陸路で赴き、数年京都で過ごし山南へ入港し、教化の途で山南から鎌倉、存覚と同行し鎌倉から山南、晩年山南から京都へ渡っていることが見て取れる。^⑩

二名の明光についての時代背景を見たが、了雲、了円ともに動乱のある道中であっただろうことが伺える。この二名を比較して挙げられるのが、支援する人物の存在の違いがある。了雲については、親族ということから源氏の強い後ろ盾があり、最宝寺の建立や、源氏所縁の武士の護衛、また備後入港の際も源氏、北条家と繋がりがある大仏氏の元で教化活動をしていた。また、了雲が備後へ入った後も源氏との関係は続いており、承久元年（一二一九年）に当時の将軍である源実朝から寺領として山南の庄を賜ったと、光照寺縁起に示されている。^⑪

一方の了円についてであるが、備後入港時の従者の部分で、了円もまた弘角、苅屋、新屋の従者を従えて入港したと残されている。この従者については了雲と混在しているが、了円について述べられているとされる部分では、源氏との繋がりがあのように感じられない。従者の件だけでなく、鎌倉末期という時代や、出生や生涯からみても了円と源氏との繋がりはないのである。では了円の支援者は誰であったのか。私は関東門徒の支援があったのではないかと推測する。仏光寺七世了源が興正寺を京都山科の地に建立する際、関東門徒の助力によって、

短期間での建立がなされた。それほどまでに関東門徒の力というものがあつたのではないかと考えられる。了円が鎌倉、京都、山南を行き来するのも、関東への教化や存覚の教学を学ぶ他、関東に赴き助力を得ていたかもしれない。しかし、関東門徒でいえば鎌倉で教化した了雲にもあり、後ろ盾という面では源氏の力ははるかに強い。さらに了円は行き来する回数が多く、さらに社会情勢の厳しい中、何度も往復するという点については疑問が残るところである。

また、備後に伝わる光明本尊からも明光らの考察が出来る。明光を開祖とする、山南の寺院である宝田院に伝わる光明本尊を見ると、親鸞以下は「真仏聖人、源海聖人、了海聖人、釈誓海、明光聖人」となっている。^②これは、仏光寺の法脈を示す了円のものであり、備後に伝わる了雲のものとは違ってくるのである。了雲は先述したように、平安末期から鎌倉時代の草創期の人物であり、仏光寺の法脈をたどるなら時代が違ってくる。つまり、了円の説を裏付けとしないだろうか。

しかし、頼朝の頼みにより、最宝寺に安置されている薬師如来の説明や、了雲は北条家、源氏との繋がりのあつた山南の領主大仏氏の元で教化をするが、了円と大仏氏の繋がりはなく、なぜ了円が西国布教の為に、山南の地を選んだのか疑問が残る。どちらの説も、矛盾や合致する点があり、どちらが正しいか、どちらが間違いであるか定義するのは非常に難しい。また、源頼朝の嫡女とされる了雲の母、承元の法難により、備後へ流罪となつた浄聞についての調査が及ばず、今後の調査内容としたい。

- ① 『真宗人名辞典』三二六頁
- ② 堤勝義『中世瀬戸内海の仏教史』四頁、五三頁
- ③ 日蓮宗事典刊行委員会編『日蓮宗事典』五四二頁
- 水原史雄『安芸門徒』二九頁
- ④ 堤勝義『中世備後の宗教・在地武士』四六頁
- 光照寺『備後光照寺 西国真宗の根本道場』二二頁
- ⑤ 『真宗新辞典』三八九頁
- ⑥ 『真宗人名辞典』一八五頁
- 平松令三『仏光寺の歴史と信仰』一二九頁
- ⑦ 『真宗人名辞典』一〇九頁
- 平松令三『仏光寺の歴史と信仰』一三〇頁
- ⑧ 『真宗人名辞典』三四五頁
- 平松令三『仏光寺の歴史と信仰』一三〇頁
- ⑨ 『真宗人名辞典』一九二、三二六頁
- 平松令三『仏光寺の歴史と信仰』一三一頁
- 熊野恒陽『興正寺史話①了源上人―その史実と伝承』二八頁
- ⑩ 『真宗人名辞典』二〇九頁
- 『真宗新辞典』三三五頁
- 『浄土真宗聖典（注釈版）第二版』年表、六頁
- 田中大『中世文化と浄土真宗』四〇三頁
- 千葉乗隆『存覺上人一期記 存覺上人袖日記』三五二頁
- ⑪ 『真宗人名辞典』三四七頁
- 平松令三『仏光寺の歴史と信仰』一三二頁
- 楠正亮「仏光寺発展の意義 了源・存覺を中心として」『中世文化と浄土真宗』四〇五頁
- ⑫ 順信は鎌倉中期に活躍した僧侶。二十四輩の第三とされ、父は鹿島明神の大宮司であったが親鸞に帰依し、順信もまた門弟となる。その後順信を源流とする鹿島門徒が形成される。晩年は親鸞の命により、関西を教化した。（『真宗人名辞典』一六五頁）
- ⑬ 『真宗新辞典』一五四頁

禁 廠

- ⑭ 『真宗重宝聚英 第二卷 光明本尊』一八五頁
 鷲尾教導「明光上人の研究」『六条学報』第十五卷
 『日本仏家人名辞書』一〇八〇頁
 光照寺『備後光照寺 西国真宗の根本道場』五〇頁
 ⑮ 『真宗人名辞典』三二六頁
 平松令三『仏光寺の歴史と信仰』一二四、一六一頁
 楠正亮「仏光寺発展の意義 了源・存覚を中心として」『中世文化と浄土真宗』四〇五頁
 平松令三『仏光寺の歴史と信仰』一三三頁
 千葉乗隆『存覚上人一期記 存覚上人袖日記』三五頁
 ⑯ 普賢晃寿『破邪顕正抄 顕名鈔』五一四頁
 光照寺史編集委員会編『備後光照寺 西国真宗の根本道場』三六頁
 ⑰ 『広島県史 通史2 中世』一五頁
 ⑱ 『広島県史 別編1 年表』六〇頁
 『広島県史 通史2 中世』八九三頁
 『広島県史 別編1 年表』八〇頁
 ⑲ 光照寺史編集委員会編『備後光照寺 西国真宗の根本道場』四一三頁
 ⑳ 小林定市『福山地方史論集』四一頁
 ㉑ 『真宗重宝聚英 第二卷 光明本尊』一五六頁

参考文献

- 大橋俊雄『一遍 その行動と思想』評論社、一九七一年
 児玉識『近世真宗の展開過程——西日本を中心として——』吉川弘文館、一九七六年
 水原史雄『安芸門徒』中国新聞、一九八〇年
 千葉乗隆『存覚上人一期記 存覚上人袖日記』同朋舎出版、一九八二年
 普賢晃寿『破邪顕正抄 顕名鈔』同朋舎出版、一九八七年
 平松令三『仏光寺の歴史と信仰』思文閣出版、一九八九年
 小峯和明『日本靈異記を読む』吉川弘文館、二〇〇四年
 熊野恒陽『興正寺史話① 了源上人——その史実と伝承』白馬社、二〇〇五年
 小林定市『福山地方史論集』備陽史探訪の会、二〇一七年

堤勝義『中世備後の宗教・在地武士』溪水社、一九九二年
堤勝義『中世瀬戸内の仏教諸宗派』探究社、二〇〇〇年
堤勝義『中世瀬戸内海の仏教史 村上水軍の本拠地芸予諸島を主として』溪水社、二〇〇八年
新妻久郎『改訂版 親鸞聖人二十四輩巡拝・関東御旧蹟を歩く』朱鷺書房、二〇一二年
国書刊行会『二十四輩次第記・親鸞聖人御直弟散在記』一九七六年
光照寺史編集委員会編『備後光照寺 西国真宗の根本道場』光照寺、一九九八年
信仰の造形的表現研究委員会編『真宗重宝聚英 第二卷 光明本尊』同朋舎出版、一九八七年
佛光寺の歴史と文化編集委員会編集『佛光寺の歴史と文化』真宗佛光寺派宗務所、二〇一一年
広島県『広島県史 通史 2 中世』広島県、一九七二年
広島県『広島県史 別編 1 年表』広島県、一九七二年

参考辞書・年表

『浄土真宗聖典（注釈版）第二版』本願寺出版社、二〇〇九年
『真宗新辞典』宝蔵館、一九八三年
『真宗人名辞典』宝蔵館、一九九九年
『浄土真宗辞典』本願寺出版社、二〇一三年
鷲尾順敬編『日本仏家人名辞書』光融館、一九〇三年
日蓮宗事典刊行委員会編『日蓮宗事典』日蓮宗宗務院、一九八一年
本願寺史料研究所編纂『本願寺年表』浄土真宗本願寺派、一九八一年
大谷大学編『真宗年表』法蔵館、一九七三年
興正寺年表刊行会編『興正寺年表』興正寺、一九九一年
佛光寺教学資料編纂委員会編『真宗佛光寺派佛光寺年表』真宗佛光寺派宗務所、一九九七年
参考論文
鷲尾教導「明光上人の研究」『六条学報』第一五卷、一九一五年
楠正亮「仏光寺発展の意義 了源・存覚を中心として」『中世文化と浄土真宗』思文閣出版、二〇一二年